



RIKKYO SECOND STAGE

Contents

- P1 ユニークな大学の一年
 P2.3 清里・清泉寮ゼミ合同合宿
 P4.5 ゼミナールの紹介 P6.7 話題の授業・夏季集中講座
 P8 立教キャンパス探訪

「立教セカンドステージ大学」は立教大学が提供する生涯学習の場です。シニア層の学び直しと再チャレンジをサポートします。



発行：立教大学 「立教セカンドステージ大学」
 編集責任：笠原清志 編集長：岡崎曠敬
 発行日：2009年1月15日
 〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1



ユニークな大学の一年

立教大学総長補佐
坪野谷 雅之



2008年4月に、立教セカンドステージ大学の第1期生96名が、池袋キャンパスの伝統的な赤レンガのチャペルで、厳かな入学式をあげてから1年近く経ち、早くも修了式の企画が始まろうとしています。

この大学の特色は、シニア層の「学び直し」と「再チャレンジ」という設立趣旨に沿い、平均年齢60歳の経験豊かな受講生と教員が一緒になって、学びの場を創り上げていくというユニークさにありますが、その約一カ年を振り返ってみたいと思います。

第1に授業面では、前期・後期を合わせて体系的な必修2科目・選択26科目、ゼミ（必修）と夏季集中講義3科目が展開され、受講生の年間平均履修数は13科目と修了要件の9科目を上回り、座席は前列から埋まり質問も多いという熱心さが印象的です。水曜日の夕方の90分間の7つのゼミナールは、定刻8時に終わることはまずないほど議論が沸騰します。夏季集中講義は、人数制限を超えて聴講する受講生が続出しました。正に当大学のキャッチフレーズ“学びの情熱尽きることなく”そのものです。

第2にイベント面では、9月に行われた八ヶ岳南麓の清里「清泉寮」での感動的なゼミ合宿が、当ニューズレターのハイライトとして、別途掲載され

ています。課外の多彩なフィールドスタディ、ゼミ単位で企画した公開講演会等も開催され、いずれも盛況でした。また、全員の役割分担としてゼミ長や各種の委員を選出して、自主的に活動計画を策定し運営することで、新たなコミュニティーが形成され、大きな成果をあげることができました。

第3に話題性では、日本で初めてシニア層の新たな学びの場として開校されたことから社会的にも注目的となり、多くの新聞・雑誌等がタイムリーに取り上げ、受講生の協力でインタビューも臨場感を添えました。文部科学省編集の『マイナビ』にも掲載されたことは特筆されます。立教大学発行の『雑誌立教』『立教ジャーナル』や校友会会報『セントポールニュース』にも毎号登場しました。

最後に、受講生は第一期生としての責任感と愛校心が強く、学びの情熱と友情の絆はますます広がっています。また、修了後の自分たちの校友会とその組織である、調査研究や交流の場としてのサポートセンターの創設作業も進むなど、社会との新たなネットワークが形成されようとしていることは非常に意義深いと思います。そして、受講生の高い評価と評判が、来年度の第二期生にも好影響を与えるものと確信しています。

残り少ないキャンパスライフを、十分エンジョイされることを念願してやみません。

学生時代の修学旅行気分に戻って、仲間との交流と清里高原の自然を満喫

★ 清里清泉寮ゼミ合同合宿

夏季休暇中の9月12日(金)～16日(火)にかけて、ゼミ合同合宿が清里開拓の拠点「清泉寮」にて行われました。合宿は2班に分かれ(各2泊3日)、受講生96名中53名、教職員9名が参加しました。チャプレンの講話・ゼミ担当教員の講演会・自然観察・ライブコンサートなど、

プログラムは盛り沢山でした。また、普段あまり交流のない所属ゼミナール以外のメンバーと寝食を共にすることによって受講生の交流はより深まり、各自の人生のセカンドステージについて語り合ったりと、大変有意義な合宿でした。



① 清里開拓の拠点・清泉寮(宿泊地)

立教大学池袋キャンパスを午前10時前に出発し、大型バスに乗って学生時代の修学旅行気分になりながら清里清泉寮に到着。都会とは違った、空気のおいしさと清里高原の自然の素晴らしさに「感動！」の一言。料理も大変美味しくて、たくさん食べながら話が盛り上がりました。(夜は飲んで語り合い…) また、素朴で味わいのある部屋でぐっすり眠りました。

② 講演後も夜遅くまで激論が続いた「講演会」

初日の夕方のプログラム、『夢かける高原』(清里の父ポール・ラッシュの生涯)のビデオを観賞し、ポール博士の無限のボランティア精神とフロンティア精神に大きな感銘を受けました。また、夕食後の笠原清志副学長の講演会「現代社会と宗教」は熱を帯びた内容で、講演後も、受講生は先生の部屋に押しかけ、夜遅くまで語り合いました。



③ 童心に戻って自然観察を楽しむ

2日目の朝食後、2班に分かれて、清里に住むレンジャー(自然案内人)の案内で自然観察へ出発。なぜか、女性のレンジャーには男性受講生が、男性のレンジャーには女性受講生が集まりました。草の実を試食したり、むし草で笛を吹いたり、皆童心に戻りました。「ヤマミュージアム」も見学し、自然環境の大切さを再認識しました。



人生のワンシーン 近藤 紀朗

早朝の散歩、清泉寮前のテラスでの語り、チャプレンの講話、講演、ライブコンサートなど、学生に戻ったような浮き浮きとした心地でした。

一方、自由時間において授業や大学に対する忌憚のない意見の数々を聞かれたことは、先生方にとっても非常に新鮮なご経験かと思えます。それほど受講生のこの大学への期待は大きく、真剣そのものなのです。もちろん自らが学ぶ場であって、教えを請う場ではありません。カリキュラム等色々の受講生の希望はあるでしょうが、受講生と先生ともども創り上げていくという特色ある大学かと思えます。この清らかな高原での仲間たちとの語りは、わたし自身の人生のワンシーンとして心に留め、この場に身を置く「幸せ」を感じております。



エネルギッシュな仲間達 木川 道子

高原の緑や自然、旅の楽しさを味わったうれしい3日間でしたが、一番有意義だったのは色々な方々を知ることができたことです。顔と名前が一致した方が少

しずつ増え、仲間意識が私の中で自然に養われつつあるようです。それにしても勉強に遊びに何とエネルギッシュな仲間達でしょう。夜、先生方を交えて講義について議論したことは、単純に講義を楽しみ先生方に感謝していた私には驚きを感じたものです。これをたたき台にしてより良い方向に進んでいくものと確信してやみません。

セカンドステージ大学の生みの苦しみも薄れ、これからはまた違った意味で継続することの難しさが生じることでしょうが、第一期生として心から応援したいしお手伝いしたいと思っています。





K. I

④ 聖アンデレ教会で武藤チャプレンの講話を聴く

自然観察のあとは、清里開拓のシンボルである「聖アンデレ教会」にて、武藤六治チャプレンの講話を畳にすわって聞きました。日本を愛し続けたポール博士の当時の様子を伺うことができ、清里開拓の苦難の道に胸を熱くしました。「ポール・ラッシュ記念センター」の見学では、前日鑑賞した『ポール・ラッシュの生涯』のビデオを買い求める受講生の姿も見受けられました。



H. O



T. U



R. U

⑤ 富士山を背に清里名物のソフトクリームを味わう

束の間の休憩時間に清里名物のソフトクリームを食べました。八ヶ岳や富士山を望みながら食べるソフトクリームは、また格別です。清泉寮ソフトクリームは、昭和51年初夏、清泉寮の喫茶メニューとして作られました。当時のメニューは、カレーライスが600円でピラフが550円。250円のソフトクリームはとても高価なデザートだったそうです。



N. S

⑥ 「思い出の渚」から校歌まで飛び出した

ライブコンサート

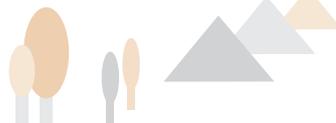
二日目の夜は、清泉寮の大ホールでプロミュージシャンによるライブコンサートを開きました。バンドのメンバーはある受講生の紹介で、立教大学の卒業生も含まれていました。「思い出の渚」や「テネシーワルツ」などの曲目、大学の校歌・応援歌の演奏に、乗りに乗った手拍子で、青春時代を思い出すようなコンサートになり、皆さん大満足でした！



T. M



M. T



H. A



正に学生になった 小木 哲朗

ゼミ合同合宿の威力に圧倒されました。とかく、通り一片の付き合いになりがちな我々ですが、二晩続けて同じ狭い部屋で、ひしめきあって飲んだ酒の味は格別のもがありました。議論がオーバーヒートした面もありましたが、本音と本音がぶつかりあって、正に学生になったことを実感しました。

盛り沢山の企画が用意され、お世話をされた皆さまの意気込みを感じました。興奮して寝不足気味でしたが、充実した三日間でした。池袋に着いて男だけでさよなら昼食会を開きましたが、この合同合宿のお陰で、本当の付き合い、切磋琢磨が始まる予感がしました。

個人的にも仲間から、今後の生き方に大いなるヒントをもらい、参加して良かったと感謝しています。



私も家族も少し成長 山中 三津子

私が今回このゼミ合宿に参加したのは、今まで全ての家事をしていた主婦が3日間家を空けることに家族が理解を示し、一人ひとりの自立に不可欠だと思ったからです。それと、もちろん人生経験の違う人たちと生活を共にし、コミュニケーションをとる経験をしたと考え、思い切って参加しました。緑豊かで雄大な自然に囲まれた清泉寮で、有意義な2泊3日を過ごし、ゼミ以外の人達とも親しくなって思い出を作ると同時に、人間関係の幅も大きくすることができました。

家庭に帰ると家族の意識が変わり、「2、3日なら家を空けても大丈夫になったよ」と夫も言うてくれました。私自身も一歩踏み出すことができ、私も家族も少し成長した合宿となりました。

ゼミナールの紹介



前回は3ゼミを紹介しましたが、今回は残りの千石ゼミ、上田ゼミ、佐野ゼミ、坪野谷ゼミを紹介します。

千石 ゼミ

● 出会いからHard

初めてのゼミの教室は皆さん少し緊張した顔。「私、第一希望のゼミではないのですが、文芸批評か・・・」と何人かの方が不安げでした。千石先生からネームスタンドを渡され「今日からファーストネームで呼び合しましょう」と言われ、初めはぎごちなかったのですが、今では姓名どちらでもOKに。のっけから各自の修了報告書のテーマ設定の話です。2回目からはもう各自のテーマ発表のうえ、宮沢賢治作の『やまなし』が宿題でした。次回には感想を求められました。

● 千石先生に脱帽

実に博覧強記な先生で、各自のテーマに、明快な方向付けとアドバイス。我々のゼミにはタイムキーパーが必要です。先生は話始めると、熱心のあまりとまらず、一人のテーマの論評でゼミの時間がなくなります。各々に必要、参考となる書籍等の紹介、中には難解なものもあり、一同汗顔ものです。美術展などもテーマに沿ったものを適宜紹介されます。ターナー賞の歩み展やエミリー・

ウングワレー展（これはすばらしい抽象画）、フェルメール展などは是非とも見逃さないようにと、色々のアドバイスが飛び出していきます。

● 修了報告書との格闘

前期で一応のラフ案を提出。各々の原稿の構成はもちろんのこと「てにをは」に至るまで、添削されて返していただきました。さあ、これからが本番。テーマは画家、作家、映画など多方面にわたる芸術評論の展開に取り組んでいます。先生からは、論旨をまとめないで、全方向に検証の翼を思い切り広げるようにと言われていました。我々何とかまとめようとするのを「むしろ混乱するぐらい追いかける」と、毎回のゼミで密度濃く学んでいます。時にはビールやワインを飲みながら、真剣に議論を楽しんでいるのです。(K)



千石 英世先生(前列右から2人目)

上田 ゼミ

● 多種多様な「とり」達

私たちの上田ゼミ（通称、とりゼミ）は13名で構成されています。先生は、動物生態学、特に鳥類が専門です。

大方の受講生にとって、鳥の研究は非日常的なことで、それだけに興味を持ちたい分野です。勿論、修了報告書の研究テーマは先生の専門に偏る必要はなく、動植物の研究以外にも環境問題や文学作品に登場する動物の検証をテーマとする人もいます。皆、独立心が旺盛で、多種多様な「とり」達の集まりです。

● ゼミ授業の進め方

「とりゼミ」には唯一つの約束事、即ち「期日までに修了報告書を提出すること」以外には何の拘束もなく自由奔放です。だから、サブゼミなどをやって、誰も互いの研究の進捗状況を確認しあったりしません。

すべて自己責任です。「とり」達の半数が観察研究をテーマに、それぞれが独自に研究を進めているから、必然的にそのような形となったのでしょう。

前期のゼミ授業に、上田研究室の大学院生3人を招き、それぞれの専門研究「オガサワラコウモリのコウモリダンゴ」の話、「アカメテリカッコウの托卵」や「やぶさめの集団渡り」の話などを聞かせてもらいました。動物行

動生態学の研究は、じっと耐えて待つ「忍耐」であることを知りました。

● 研究成果

自由奔放な「とりゼミ」の急がず慌てずの「とり」達とはいえ、研究成果を発表しなければならない時期になりました。でも、決して「托卵」をさせてはいけません。いくら多種多様な「とり」達の集まりとはいっても、カッコウではないのだから。観察を主体としたテーマはまとめが大変ですが、それだけにやり甲斐がある研究です。観察研究以外のテーマを選択した「とり」達も、素晴らしい修了報告書で「おやどり」を驚かせましょう。(T)



上田 恵介先生(前列 右から3人目)



佐野 ゼミ

総勢15名の佐野ゼミは、男性7名、女性8名の構成です。指導される佐野先生は、四国徳島県のご出身で、7つのゼミナールの担当教員の中では一番若い先生です。ゼミのメンバーは先生から見れば親世代であり、何かと気苦労が多いことと思っております。

メンバーは、日本の高度成長を若さと健康と明るさを発揮して築いて来られた方ばかり。佐野ゼミの雰囲気を一言で表しますと、全員が一致団結した“**One for All, All for One**”。まさに、やる気溢れたグループです。

研究テーマの決定

4月のゼミ発足後、ゼミの活動について全員で話し合いました。その結果、山梨県上野原市で市議会議員をされている長田さんの提案により「上野原市西原地区の活性化」に取り組むことになりました。自然と調和した山村の佇まい、日本の原風景を残す西原地区ですが、このままでは過疎・高齢化により限界集落になることから、その解決に取り組むこととなりました。

現地視察

7月28日～29日、1泊2日の日程で上野原市西原地区へ佐野ゼミ全員で現地視察を行いました。

元市役所職員だった地元の方の案内で、市内および西原地区をバスで巡り、いかにしたら集落が元気を取り戻せるかについて、夜遅くまで話し合いました。

現地視察後のレポート作成

現地視察の感想と、どうしたら元気なまちづくりが出来るのかをテーマに、一人ひとりレポートを作成しました。位置的には都心より1時間と近い。この立地性を活かした提案と自然環境を活かした提案の二つに分類された具体策が多く集まりました。一方では、現状の課題や問題点も浮き彫りにされました。

後期の活動

10月26日のホームカミングデーに、上野原の現況を伝えるため佐野ゼミでブース出展。西原の皆さんに来て頂いて上野原の名物「酒まんじゅう」等の物産販売、現地視察の結果をまとめたパネル展示や、かわら版の配布をゼミ生一丸となって行いました。

修了報告書は、上野原をテーマに書く人と、NPO・地域づくりなど自分の関心領域で書く人に分かれて話し合い、それぞれ完成に向けて取り組んでいます。(M)



佐野 淳也先生(前列中央)

坪野谷 ゼミ

「若さ」と「バイタリティ」でパワー全開

坪野谷ゼミのメンバー構成は女性3名、男性11名。男性が最も多いゼミです。職業も、現役の弁護士、税理士、会社経営者、サラリーマンなどまるで異業種交流会さながらです。女性陣は主婦であり元会社員ですので、実体経済や家庭経済に詳しい手ごわい仲間です。先生の66歳の若さとバイタリティを見習って、研究熱心の傍ら、ゴルフと酒とグルメを楽しんでいます。平均年齢(精神年齢)は、最も若いゼミではないかと自負しています。

「サブプライムローン問題」で大激論

坪野谷先生の専門分野は「金融論」と「起業論」ですが、研究者というよりも某信託銀行出身のバリバリの金融マン。特に、国際金融、実体経済のプロです。ゼミでは、現在の複雑な国際金融情勢と問題点を解き明かしてくれます。今話題のサブプライムローン問題には、全員の関心が高く、侃侃諤諤(かんかんがくがく)、激論を戦わせています。いつもグローバル経済から日本経済、家庭経済と話題は盛り上がり、そして、身近な円高、株安、投信下落、不況、失業問題など、いくら時間があっても議論は尽きません。

修了報告書は先生のキャラクター似に

ゼミ生全員が、経済と金融に関心があるのは当然ですが、修了報告書のテーマは他のゼミと同じように、各人の裁量に任されています。例えば「企業のブランド力とは」、「起業の理論と実践」、「海外ロングステイ計画」、「スポーツビジネス論」、「リバースモーゲージの考察」、「遺言信託の活用」等々、各自が仕事や家庭で実践的に経験し、或いは新たに学んだ知識とノウハウを活かしたテーマに取り組んでいます。先生の独特のキャラクターに似た、修了報告書が完成するものと期待されます。

(Y)



坪野谷 雅之先生(前列右から3人目)

話題の授業

松平 定知 先生

「歴史と文化の探求」



松平先生の人となり

NHKテレビの看板番組「その時歴史が動いた」でお馴染みの松平定知先生の授業です。先生は受講者数を20～30人程度と想定していたようですが、実際は70人以上が受講している人気授業です。

松平先生は昭和44年にNHKに入局し、高知放送局に5年間勤務した後、東京に戻り昨年退局するまで、ずっと東京勤務だったそうです。新入社員時代の思い出として「高知に赴任する時に高知放送局の人と、はりまや橋で待ち合わせをしたのですが、相手が自分の顔が判らないと思い、胸に名札を付けたら周りの人から奇異の目で見られた」とエピソードを披露してくれました。食べ物の好き嫌いは特になく、ゴルフの腕前はハーフラウンド2時間半程度だそうです。

熱を帯びた講義

講義は歴史上のヒーローやヒロイン達がどの様に生きたか、また周りの人々との関係も明らかにしながら、彼らのセカンドステージの主体的な生き方を検証していく

ものです。まず、松平先生の尊敬する「吉田松陰」から始まり、「篤姫」「直江兼続」「外戚（蘇我氏、藤原氏、平氏、源氏等）」「北条政子」と続き、更に「武田信玄」「徳川家康」「織田信長」「平清盛」…と続きました。

私は歴史には疎いのですが、先生の熱の入った講義に自然に引き込まれて行くと共に、その知識の豊富さに圧倒されました。時折、話してくれる番組のエピソードも楽しいものです。授業中は質疑がとても活発で、受講生から多くの質問や意見が出されますが、先生はその一つ一つに丁寧に答えてくれます。質疑がヒートアップしてくると、先生の説明はまるで授業時間を忘れたかの様に一段と熱を帯びてきます。受講生も真剣に聞き入ります。そんな折、無情の終業チャイム。

「その時授業が終わった」のです。

(I)



新井 美穂 先生

「聖書と私」—ともに生かしあう世界—

若々しくチャーミングな先生

思い返せばセカンドステージはチャペルでの入学式からスタートしました。パイプオルガンの演奏や聖書の朗読などに、いよいよキリスト教に基づく学校での生活が始まるのだと実感された方も多かったのではないのでしょうか。「聖書と私」はカリキュラムの中で唯一聖書をテキストとする授業です。シラバスには「基礎知識や聖句知識を確認するテストの実施」と書かれてあったので、初めての講義の日にはどんなに厳しい先生なのだろうかと緊張していましたが、壇上に現れたのは若々しくチャーミングな先生でした。

授業はまず旧約聖書をひもときイスラエルの歴史を学ぶことから始まりました。先生の感情豊かな口調で黒板いっぱい書いてくださる地図のおかげで、壮大なストーリーが広がりました。

聖書における荒野の意味

ゲストスピーカー稲本誠一先生の児童養護施設や植松功先生のバングラディッシュにある知的障害者のための施設のお話。そこで暮らしている人達の困難な環境は、荒涼と続く砂漠に身一つで立つようなものなのでしょうか。聖書には「荒野（あらの）」という言葉が様々な場面出てきます。先生は「荒野は希望の無い場所ではなく神か

ら愛されているというメッセージを受ける場所」だと語って下さいました。受講生一人ひとりの受け止め方は違うと思いますが、心の内を見つめ直すきっかけになったのではないのでしょうか。

新井先生の特技

最後に新井先生の素晴らしい特技をご紹介します。ひとつは、受講生の顔と名前を驚くべき速さで覚えてくださったこと。そして、毎回一人ひとりのリアクションペーパーに先生からのメッセージが書かれ返却されること。全員が先生より年上の学生を前に授業を行うことはストレス(?)がたまるせいか、授業のある木曜日の朝は「お腹が痛い」こともあるそうです。こんな風に受講生の疑問・感想にひとつずつ丁寧に答えてくださる先生はきっと私たちを愛してくださっているに違いないと確信しています。

(U)





加藤 仁 先生

定年後の生き方

定年後の8万時間は一点突破から

加藤先生は、3,000人以上の定年退職者の取材を25年以上にわたって続けています。先生の話しでは「定年退職者は、組織から離れた“個”としての人間であり、その営みにたいして興味が尽きない」とのことです。「80歳まで生きるとして、定年後の余暇時間は8万時間、これは会社で働いていた時間とほぼ同じである。まずは一点突破から道は開けてくる」との励ましの話が印象的でした。

授業の中で、現在ご活躍中の先輩お二人の講演がありました。和田實さんは84歳の高齢にもかかわらず「私の自耕人生」と題し、東京難民塾での救済活動と外国人への日本語塾の活動のお話。「社会人として、何か集中するものを持つように」とのアドバイスをいただきました。藤田巖さんからは「私の福祉活動」という、定年前後のプランニングと定年後の福祉美容室の開設と運営のお話でした。「目標を立て挑戦する、苦しくても決してあきらめてはいけない」と励まされました。

講義終了後の私のレポートに、先生より「今後も修正を重ねて、よりよき人生という作品を築き上げて行かれることを祈念します」とのコメントをいただき、これからの8万時間をいかにデザインし行動していくかを考えさせられる授業でした。(M)



鈴木 秀子 先生

愛と癒しのコミュニオン

貴方を大切に受けとめます

夏季休暇も終わりが近づいた残暑の厳しい中で、3日間の連続講義が行われました。朝10時から夕方5時まで約30数名の受講生が参加して、座学だけでなくロールプレイ、疑似体験、さらに「お絵かき」も交えた貴重な体験学習でした。

1日目、傾聴の基礎として「相手の話を真剣に聴くとはどういうことか?」「相手は無条件で受け止める」という体験からスタートです。全員廊下に出て二人組になり、お互いの欠点を伝えながら「貴方の今のままを大切に受けとめます」と挨拶し合いました。

午後は子供のころ印象に残っている一場面をクレヨンで「お絵かき」して過去の自分をふりかえりました。

うなずくだけで何も話してはいけない

2日目、相手を信頼しより良い関係を築くことがテーマでした。手ぬぐいで目隠しをして、眼と口がきけないという条件の中、2人で組んで校内を歩きました。残された五感のうち、耳からの情報、手の感触や匂いで物事を判断するだけという体験は、相手を全面的に信頼するしかないことを実感しました。

3日目、アクティブリスニングの体験です。3人一組で話し合い、聴き方やフィードバックの仕方を学びました。鈴木先生は「相手の話したことを受容して、うなずくだけで、反論やアドバイスをしてはいけない」ということを強調されました。傾聴の大切さと難しさを知り、人間として大切なことを再確認しました。(Y)



永石 文明 先生

環境保全とコミュニティー形成

自然に身をおいて

夏休み中受けた3回の授業でした。1回目は、フィールドミュージアム「さいたま緑の博物館」で、森と人間の間にある絆を学び、また、「里山」も「本来は、生産農地である」であること、そこでは、都会の人が懐かしく感じる人と土との共存を垣間見ることができました。

自然との調和(フィールドワーク)

2回目は東久留米市役所から歩きはじめ、落合川流域における「川づくり活動」の学習でした。竹林公園、

南沢湧水などの湧き水のことを言う「沢流れ」をみて、今なお残る神秘的な景観計画に堪能。

川の上流では、一滴から始まり大河に変わる、その出発点の落合川(八幡町源流)に出会えたときは、大変な感動をおぼえました。

人と農業

最後は、教室内での授業で、キューバのハバナのDVDを鑑賞。農業におけるコミュニティーが形成され、「省エネルギーと自給率向上」「新しい雇用」「食の安全と地産地消」が進んでいるのは、目を見張るものがありました。次にフィールドワークで学んだ森と川のワークショップを通じてみんなで議論し、さまざまな具体例からそのルールを探る勉強でした。

最後に、永石先生からは、机上からは味わえない時間をいただき感謝しております。(S)

立教キャンパス探訪

■ チャペル(礼拝堂)



正門を入ると右側に見える、チューダー様式を基調とした赤レンガ造りの建物がチャペルです。

このチャペルは、キリスト教に基づく教育理念を掲げる立教大学のシンボルとして、多種多様な形で学生に開放され、毎朝の礼拝に誰でも入ることが出来ます。桜が咲き乱れる4月、立教セカンドステージ大学の入学式が伝統的なキリスト教の儀式に則り、この礼拝堂で厳粛に執り行われました。

また、本学最大のイベントはやはりクリスマス！25mを超える大ヒマラヤ杉2本に、色とりどりのイルミネーションが飾られ、チャペルから流れるハンドベルやパイプオルガンの音色、メサイアの美しい歌声はクリスマスの雰囲気をも盛り上げます。

「ここチャペルは魂の母、図書館は知識の母であります。立教の自由の扉は常にひらかれています。」

昭和2年、受験雑誌に載った立教大生の母校を讃える文章の一部で、今もその精神は脈々と流れています。

■ チャペルの歴史

チャペルの正式名称は、「立教学院 諸聖徒礼拝堂」です。立教大学が池袋へ移転した1918（大正7）年に本館が建てられ、チャペルはその2年後に竣工。

当時、真ん中の本館（モリス館）を境に、左に図書館、右に礼拝堂（チャペル）を配し、中央の軸線を延長して、中庭を囲んで第1食堂を中心に、左右に寄宿舍を置くプランニングがなされ、キリスト教精神を基に、学生が生活しながら学べるよう建築されました。

竣工後まもなく1923（大正12）年、関東大震災で被害に遭い大修復、最近では、1998年から2年かけて、日本で初の免震工法で耐震補強が行われました。

真赤なツタに覆われたチャペルは、ハッと息をのむような美しさです。



カレッジライフ



講演の数々

ゼミ授業の一環として、ゼミごとに自主的に企画する講演会などが開催されました。「セカンドステージの資産形成」（講師・坪野谷先生）、チャペルでのパイプオルガン演奏会（演奏者・伊藤夫妻）、「宮沢賢治における文学と心象風景」（講師・千石先生）、「市民型公共事業 霞ヶ浦アサザプロジェクト」（講師・飯島先生）、「動物学で人の心は理解できるか」（講師・上田先生）、エルダー協会との交流など数々ありました。

この他に、イスラム寺院の見学・上高地合宿・ハイキング・グルメ等、受講生がそれぞれ自発的に企画し、仲間を集めるなど、幅広い活動や交流を通じて、若き日の学生時代そのままの熱きカレッジライフを楽しんでいます。

クリスマスパーティー

後期最大のイベントであるクリスマスパーティーは、チャペルでクリスマス礼拝のあと、構内の一角にある「太刀川記念館」で盛大に繰り広げられました。

ハンドベルの美しい音色が響き渡り、学長、チャプレンの挨拶に続き、流暢な英語の「ブッシュからの手紙」で大笑い。ビンゴ、そしてプレゼント交換などみんなの顔が輝きました。

最後に「イマジン」の歌詞朗読に続き、飛び入りの、全員歌で全員が手を取り合い、大きな一つの輪になって大合唱。これぞ、第一期生の友情の絆！

編集後記

第2号は、創刊号の反省を活かし、効率よく編集作業が進みました。広報委員全員がこの号で最後となるため、一行一行丹精込めて書き上げました。今後は第一期生として、セカンドステージ大学を応援すると共に、広報委員の絆も発展させていきたいと思います。ご指導をいただいた諸先生方、感想文・写真提供の受講生の方々に心からお礼を申し上げます。

◆広報委員会スタッフ（名簿順）

角川則光、柳沼正秀、伊藤喜一郎、上田理江、甘粕武子、呉東富、池田謙一、高橋雅治、赤石初枝、上江洲時子、岡崎曠敬、増田忠雄、山下由喜子、杉山徹也、山中宏一

★表紙の写真・デザイン：山中宏一